

青少年のコミュニケーションと情報環境の変化

～ NHKの青少年番組の変遷を事例として～

NHK放送文化調査研究所 小川 文 弥

1. 問題の所在

青少年のコミュニケーションは、情報環境の展開の中で、新しい状況に直面している。情報環境の変化は、これまでの伝統的なコミュニケーションのとらえ方では把握できないものであり、情報環境との「共生」によって新しいタイプの青少年が登場してきている。

D. ラーナーは、社会構造とコミュニケーションとの関連について、コミュニケーションの体系は全体的社会の変化の指標であり、動因である、という命題を導き出している。これに従えば、青少年のコミュニケーションの特徴は、彼らを取り巻く情報環境との関連を分析することによって明らかになるのではないだろうか。

この報告では、情報環境の具体的な事例として、NHKの青少年番組（『若い広場』と『YOU』）を取り上げて、20数年にわたる番組のあり方を、それに対応する青少年の意識やコミュニケーションの変化と関連させて解明することによって、青少年のコミュニケーションと情報環境の問題を考察してみよう。

2. 青少年のコミュニケーション構造

青少年にとって欠かせないコミュニケーションをあけてもらうと、「友人と話す」「テレビを見る」が7～8割を占めるが、その中で最も欠かせないもの、ということになると、「友人」「家族」との話が最も多くなり、マス・コミ行動は極端に減少する。

コミュニケーション構造を、「人間」と「環境」との関係性を基軸にして、行動面と欲求面からとらえると、次のような変化がみられる

（昭和48年と59年との比較）。

行動面の特徴としては、「即自的」「第1次関係」ととらえた行動が増加しているのに、「対自的」レベルではあまり変化していない（ただし、日本人全体では減少）。また、マス・コミ行動では「ラジオを聞く」「音楽を聞く」という人が増加している。

欲求面では、「自己内部」の“何か心にうばわれたり、感動してみたい”と、「外界・インプット」での情報欲求、「外界・アウトプット」での“話し上手になりたい”が増加している。これに対して、対人レベルのコミュニケーション欲求では増加はみられない。

以上のような、青少年のコミュニケーション構造の特徴は、情報環境の肥大化と対人コミュニケーションにおける希薄化を示しているといえよう。

3. 青少年の情報環境

青少年は今の大人とは違、た情報環境の中で育、てきている訳であり、その中でもテレビの占めるウェイトは無視できない。

つまり、彼らの現実の生活の中で、テレビ（メディア）が「環境化」することによって、①テレビによる影響が一種の「先有傾向」として、青少年の意識に組み込まれている、②テレビ（メディア）との間に成立するコミュニケーションが、対人レベルのコミュニケーションの特徴を大きく規定する、③情報環境がリアリティを持つことによって、コミュニケーションの欲求充足の対象として自立化する、ことなどがその特徴として指摘できよう。「自我と環境は無限に融合する。空間と媒体

と機械(機器)が自我に含まれる」(中野収)という「カプセル人間」の考え方は、こうした情報環境の特徴を典型的にとらえている、といえよう。

4. 情報環境の変化の事例

～「若い広場」から「YOU」への展開～
 青少年の情報環境の変化を長期的にフォローできるという意味で、NHKの青少年番組を取り上げその変遷をたど、てみよう。

青少年番組は、主として視聴者の量的拡大を図る娯楽番組と、青少年の健全育成を目的とする教育・教養路線の二つに分けられるがここで扱う番組は後者のケースである。

『若い広場』(昭和37年度～56年度)の見られ方からすると、青少年の情報環境の中で占めるウェイトは決して大きくなかったが、その後を受けて57年4月に始まった『YOU』は若者の共感を呼び、人気番組となった。

『YOU』の人気を明らかにするためにはその前身としての『若い広場』のたどった流れを振り返ってみる必要がある。この番組は、編成上の特徴から5つの時期に分けられるが、それにほぼ対応する青少年のあり方の特徴は、次のように分けられる。①「青年期の大衆化」(昭和37年～40年)、②「社会への問題提起と若者文化の開花期」(41年～44年)③「私生活主義の高まりと意識の転換」(45年～48年)、④「管理化・高学歴化によるひすみの顕在化」(49年～52年)、⑤「青少年の社会化に関する問題の深刻化」(53年～56年)

「若い広場」の流れは、社会状況や青少年のあり方によって影響を受け、オイルショックの前後1, 2年を境にして大きく2つに分けられる。前期がⅠ～Ⅲ期(ほぼ、さきほどの①～③に対応)で、後期が(Ⅳ)～Ⅴ期(ほぼ、④⑤に対応)である。2つの時期の「若い広場」の特徴をまとめてみたのが

表である。

2つの時期における青少年の変化で最も特徴的なのは、青少年という存在が次第に意識されなくなったことであった。豊かな社会を背景にしての青少年のモラトリアム化、若者文化を取り込んだ社会の若者化などによって、若者と大人との間には、かつてのように明確な非連続現象は存在していない。青少年の意識についての時期、世代、発達による変化に関する最新の分析によっても、「かつていわれた若者の対抗意識や、進歩的・革新的な姿勢は、もはや期待できない時代」(吉田稔)なのである。

表 2つの時期における番組の特徴の変化

前 期 (Ⅰ～Ⅲ期)	後 期 ((Ⅳ), Ⅴ, Ⅵ期)
○編成理念にもとづく番組づくり (タテ・コミ)	○青少年の実態に基づく番組づくり (ヨコ・コミ)
○フィルム構成+スタジオ フィルム構成では対象に密着した取材 (演出・構成のウェイト大)	○スタジオ中心 取材対象とのかかわり方が希薄になる (番組素材のウェイト大)
○話し合いの論理性を重視 (討論・論争) 「メッセージ性」中心	○話し合いの場、共感性の重視 (ふんいき、場) 「関係性」中心
○結論をまとめる	○結論は無理に出さぬ

5. 青少年のコミュニケーション構造と情報環境をどうとらえるか

青少年のまわりにおいて肥大化する情報環境と、その中で基層として位置づけられる対人コミュニケーションの重要性、中でも、第1次関係ととらえたコミュニケーションへの傾斜は、青少年のコミュニケーションの特徴が、単に、自己のアイデンティティの確立というとらえ方では解決できない状況を示しているといえよう。「YOU」がなぜ受けているかの原因を探ることによって、この問題を考察してみよう。